平成１９年度海外研修派遣報告
「スタンフォード大学で学んだ日本における医療業界のメリットとデメリット」

島根大学医学部放射線医学講座　内田幸司

1．期待していたこととその結果

私が今回この研修に参加した目的は大きく分けて二つある．

一つ目は，米国の放射線技師の仕事を間近で見学することである．私は，RSNA で米国の放射線技師についての講演を幾度か聞いたことがあるが，実際の現場を見たことがなかったため，今回の研修で是非とも見学してみたいと思っていた．それは，他国の技師を知ることで日本の技師の良いところはもとより，悪いところも知ることができると思ったからである．結果的には，スタンフォード大学病院の CT 専門技師，MR 専門技師および放射線治療専門技師の仕事を見学することができた．米国では技師の専門化が進んでおり，各部署の専門技師が後輩の指導に当たっていて，主任クラスでもローテーションをしている日本の多くの病院とは大違いであった．しかし，本システムにも一長一短があり，大学病院で業務している私としては大賛成であるが，専門性を追求するあまり知識に偏りが生じてしまうのではないかと感じた．また，スタンフォード大学病院の勤務体制は2交代制で，午前中に就業している技師の多くは女性だったことにも驚かされた（病院勤務技師の男女比は1：1）．

二つ目は，MR を利用した研究手法を学ぶことである．当院はスタンフォードから提供された撮像シーケンスも用いて研究を行っているため，これらのシーケンスがどのように作成・活用されているかを実際に確認してみたいと思っていた．スタンフォード大学のルーカスセンターでは，シーケンスを作成するにあたって数学者や工学者といった専門スタッフが常駐しており，単科で研究を進めることが多い日本の大学とは大きくことなった研究手法が取り入れられていた．また，新たに開発したシーケンス等を即座に特許所得することが，本研究所の知名度を上げているということを実感した．

2．技師から見た日本と米国の違いをどう感じたか

病院に勤務する米国技師の多くは与えられた業務を忠実に実行することが最優先であり，誰が検査しても常に同じ画像情報を提供できるシステムを構築していた．このため，技術を伝承することが苦手な日本人は，本システムのメリットを少しでも見習う必要があるのではないかと感じた（注：少なくとも私はそのように感じている）．

3．最も印象に残ったこと（セミナーとイベント）

セミナー：Gary M. Glazer 教授の「Future of Radiology」では，同じ情報を文字表現と画像表現で比較して，なぜ画像情報が重要視されているか解説して頂いた．その中で，「画像診断は今後も医療界で重要な位置を占めるだろう！」と熱く語っていただいたことが最も印象に残った．

イベント：今回研修に参加された方々には大変申し訳ないが，米国航空会社（サンフランシスコ→成田便）のパイロットが行方不明になったことが最も印象に残った．私は常に日本の航空会社を利用するため，今回のハプニングには正直驚いた．このような話を聞くと，日本の企業レベルは世界的にも高いと自負できるであろう．

4．今後の海外研修のあり方について

本海外研修は，技術や学問を学ぶための研修ではなく（講義の内容の多くは日本でも学ぶことができる），自国の医療システムを見直すための研修であると感じた．このため，今後はもう少し病院見学コースを増やして頂きたいと同時に，他の医療職種（看護・検査・事務）の方々の講義や交流の時間を作って頂ければ本研修の目的が明白になるのではないかと感じた．

5．お気に入りの写真1枚

お気に入りの帽子をかぶって上機嫌な Michael Moseley 教授：教授は京都で開催された ISMRM2004 の会長であり，本研修会におけるスタンフォード大学側の総責任者でもある．

最後になりましたが，このような公私ともに有意義な海外研修を企画してくださった日本放射線技術学会，スタンフォード大学，GEYMS のスタッフの方々はもとより，丁寧かつ適切に我々を引率していただいた福西先生，私を快く送り出して頂いた島根大学医学部放射線部の北垣教授，小松技師長にこの場を借りて厚く御礼申し上げます．